論文の和文要約

論文題目	危機と日常のあいだ：香港 2019 年デモにみるポピュラー文化の政治化
氏名	小栗宏太

2019 年、香港では、大陸への容疑者移送を可能にする法改正に反対する抗議運動（2019 年デモ）が起こった。この運動の直接的な背景となる中国返還後の香港の政治問題については、既に複数の研究によって取り上げられている。一方で本運動においては、様々な大衆文化由来のシンボルが活用されたり、芸能人の発言が争点となったり、郊外のショッピングモールが警察と市民の衝突の場になったりと、直近の政治問題を超えた長期的な日常生活との繋がりを感じさせる現象も観察された。2019 年デモは発生から約 1 年後、反体制運動を強硬に取り締まる国家安全維持法（国安法）の制定により、事実上終焉した。しかし、この運動がより長期的な日常生活をめぐる想像力に支えられているとすれば、表面上の政治運動が沈静化しても、その根源は残り続け、今後の香港を占う重要な課題となるだろう。そこで本論文では、こうした現象を取り上げ、日常的なポピュラー文化との関わりという観点から、2019 年デモを捉え直すことを目指した。

第 1 部では香港政治、文化研究の動向および 2019 年デモの背景と展開を概観する。第 1 章「デモの都とポピュラー文化：香港 2019 年デモの背景と本論文のアプローチ」では、香港におけるポピュラー文化をめぐる研究動向を整理した。1997 年の返還前後、香港においては中国大陸とは異なる香港の固有性をめぐる議論が活発に交わされ、中でも第 2 次世界大戦後に独自の大衆的消費文化やメディア文化が発展したことが香港人意識の誕生に寄与したと指摘する論考が複数刊行された。こうした議論の背景には、香港社会全体が概して政治に無関心であり、政治運動の代替物として消費に情熱が傾けられているのだ、という認識もあった。しかし返還後の香港では市民の政治への関心が高まる「政治化」が進行し、こうした説明は妥当性を失ったとの指摘が政治学の立場からなされている。そこで本論文では、こうした転換を意識し、脱政治的とみなされていた消費行動が政治争点化したプロセスを探るため、2019 年デモの中で「香港らしい」生活経験が争点となった場面を取り上げ、その背景を考察することを目標としている。

こうした分析を通じて、本論文では、香港におけるポピュラー文化と政治運動とをめぐる既存の議論の限界を乗り越えることを目指している。第 1 の限界は、日本のアニメや漫画、ハリウッド映画などの影響が指摘されてきたことである。そうした外来の影響力を強調する視点では、上に述べたような香港内部の議論の展開が捉えきれない。第 2 に、抗議運動におけるポピュラー文化の表出を、デモ参加者個人の消費体験に関連付け「ストリートに出るオタク」などとして定式化する、個人の経験偏重の傾向が見られることである。類似の傾向は、香港における独自の大衆文化の興隆を戦後ベビーブーム世代の個人的体験と結びつけて論じる傾向の強い、香港内部のポピュラー文化論にも見られる。こうしたアプローチでは、個別の消費体験が「香港らしさ」「香港人」といった集合的次元と結び付けられる過程が見えてこない。第 3 の限界は、抗議運動の中で言及される個別の作品の内容そのものに政治的

メッセージを読み込む傾向が見られることである。こうした読解は、例えばある活動家が日本のアイドルの楽曲と自身の状況とを結び付けたり、政治集会においてハリウッド映画のセリフが香港の境遇を表すものとして引用されたり、運動当事者によってもなされることがあるが、そのことは必ずしもそうした作品自体がはじめから内在的に政治的意義を備えていることを意味しない。とりわけ外部の観察者による類似の読解は、その作品をめぐる当事者間の議論の蓄積の過程や、個別の作品が当事者にとってそれほどの政治的重みを持つに至った背景を捨象してしまう恐れがある。

そこで本論文では、政治とポピュラー文化とを直裁に結びつける解釈を抑制しつつ、香港における当事者自身の批評、とりわけ集合的次元に関わる議論を取り上げ、香港におけるポピュラー文化が「政治的」（political）なものとして、立ち現れるに至った背景を香港におけるポピュラー文化の「政治化」（politicalization）として考察する。方法としては、2019 年 6 月と 9 月に行った 2 回の短期間の現地観察に加えて、主としてインターネット上での配信や報道記事を通じて、デモの動きを遠隔的にではあるもののリアルタイムに観察した情報を主として用いている。また集合的次元に注目するために、特定の事件や出来事に関する評論記事も多数収集し、分析した。当事者内部の議論を重視するため、英語や標準中国語で発信される情報以上に、おそらく外部への発信力がさほど期待されていないであろう広東語の情報をとりわけ重視した。

第 2 章「触発するシンボル、煽動する文字：スローガンとキーワードからみる 2019 年香港デモ」では、香港内部における集合的議論の蓄積と、それが持つ政治運動への影響力を取り上げるため、2019 年デモの展開を整理するとともに、その各場面において流通したシンボルやスローガンを考察した。そうした記号類の拡散は運動戦力上、「文宣」（文字の宣伝）と呼ばれていたが、宣伝と名付けられてはいるものの、その多くは読解に香港の文化や政治にまつわる一定の知識を要求するものであり、外部の人間には理解不能なものであった。本章では、こうしたシンボルやスローガンが、のちに香港政府や中央政府が「煽動文字」（煽動的文言）などとして処罰の対象とするほどに、大きな影響力を持つに至った過程を考察している。

以降の各章では、より細かなトピックに対象を絞り、こうしたハイコンテクストなシンボルに織り込まれているローカルな生活経験をめぐる想像力を取り上げている。

第 2 部では「カントポップ」と呼ばれる広東語ポップスと政治運動との関わりを考察した。第 3 章「カントポップの誕生と死：香港におけるポピュラー音楽と政治」で取り上げるように、1970 年代に産業として確立したカントポップは、香港人意識の核をなす消費体験として研究者らの注目を集めたこともあったが、歌詞の内容はラブソングが中心であり、直接に社会情勢を歌っていたわけではない。返還後に業界が低迷し、さらに「中港矛盾」と呼ばれる大陸との政治的、社会的摩擦の増加も取り沙汰されるようになると、商業的利益を重視して政治と距離を置く業界と社会情勢との乖離も顕在化した。

第 4 章「2014 年のカントポップ：中港矛盾下の分裂と模索」では、こうした状況を、全く異なる形で注目を集めた G.E.M.と My Little Airport（MLA）という 2 組の歌手を通じて検討した。歌手の G.E.M.は、2014 年に中国大陸のテレビ番組に出演したことがきっかけで、華人世界で著名な国際的スター歌手となった一方で地元においては「香港を捨てた」と非難された。香港のローカルな社会問題を痛烈に当て擦る楽曲で著名となったインディーズバンド

の MLA は、同年「こんな香港はもうわたしの地元ではない」と歌う楽曲をリリースして話題を呼び、雨傘運動にも参与して民主派層からの支持を集めた一方で、国営メディアからは「香港独立派」歌手として名指しで批判された。

第 5 章「不協和音：香港 2019 年デモとポピュラー音楽」では、2019 年デモの際にもこうした路線対立の影響が見られたことを指摘した。積極的に運動に関与し、関連する楽曲をリリースする歌手がいた一方、主流派の歌手たちは大陸からの締め出しを受ける商業的リスクを考慮して沈黙を保ち、一部はさらに積極的に香港政府や北京政府を擁護した。こうした路線対立は、大陸との関わりをめぐって分裂した返還後の香港社会の縮図であり、かつて社会全体の共通体験として研究者の注目を集めてきた香港のポピュラー文化が、今日の政治状況の中で分裂したことを示している。2019 年デモの中では、民主化を支持するビジネスを選択的に消費する政治的消費も普及した。今日の香港において消費は、政治と深く関わる行動になっているのである。

かつての共通体験の瓦解は、失われた過去への郷愁も喚起する。第 3 部では、香港都市部と大陸側の深圳との間に横たわる広大な郊外・郷村地区である新界に注目し、失われた消費体験をめぐる意識を取り上げた。第 6 章「方法としての新界：香港のフロンティア」に整理するように、都市部との距離などを理由に開発が遅れた新界は、戦後初期においては華南郷村社会を実地観察できる貴重なフィールドとして西側諸国の人類学者の注目を集めたこともあったが、1970 年代以降は郊外としての開発も進んだ。地理的には香港内で最も大陸に近い地域である新界は、返還後に両者の往来が活発化する中で新たな経済的価値を持つようになった一方で、大陸からの買い物客の流入が郊外の生活空間にもたらす弊害が社会問題となった。第 7 章「香港郊外の誕生と変貌：沙田ニュータウンと新城市廣場」で取り上げる沙田ニュータウンの事例では、かつて住民の間で人気を博し、香港のニュータウン計画の成功例として喧伝された街の中心的商業施設である「新城市廣場」が、大陸からの個人旅行解禁後に大規模なリニューアルが行われたことで顧客層が一変し、住民からは「もはや沙田人、香港人のものではない」と考えられている。

沙田を初めとする新界ニュータウンでは、大陸人から街を「光復」する（取り戻す）ことを掲げるデモ活動が行われるようになる。2019 年デモで用いられた「光復香港」（香港を取り戻す）のスローガンも、こうした新界での活動に由来する。こうした既存の社会問題とも合流し、2019 年デモは次第に、それまでの抗議活動の中心だった都市部の官庁街から郊外地域へと拡大し、更に各地のローカルな政治対立を顕在化させていった。第 8 章「もうひとつの前線：香港 2019 年デモの新界への波及と白シャツ隊襲撃事件の背景」では、国際的な注目を集め、2019 年デモの展開にも大きな影響を与えた元朗駅での白シャツ集団による市民殴打事件を、こうした新界のローカルな事情という観点から考察した。同事件は、国際的な報道などにおいては、背後に香港政府・中央政府がいることを示唆する疑惑を取り上げるものや、あるいは地理的近さから単純に大陸との政治的近さを類推するものなど、比較的単純な政治力学に着目する観点から取り上げられることが多かったが、香港内では、かつて人類学者たちの研究対象となってきた郷村社会の担い手たちが持つ特殊な政治権力との関連を検証する報道が相次いだ。こうした報道などを読み解きながら、本章では、2019 年デモの流れを変えた同事件も、単なる政治家や活動家の動きだけではなく、背後にあるローカルな事情に着目しなければ理解できないことを指摘した。

第 4 部では、国安法の導入以降の展開を取り上げた。第 9 章「嵐の中のティーカップ：ミルクティー同盟と国際化する香港 2019 年デモ」では、2020 年以降、香港と東南アジア各地の民主化運動家をつなぐ国際ネットワークとして注目を集めた「ミルクティー同盟」運動を検討し、この連帯がインターネット上においてある俳優をめぐって生じた些細な論争がきっかけとなって偶発的に生まれたものであり、その経緯自体が、本論文で論じてきた日常生活が政治的シンボルに転ずるプロセスを示していると指摘するとともに、そのシンボルとなったミルクティーも、香港のローカルな飲食文化を象徴する飲み物として、以前から公的な関心を集めてきた経緯があることを取り上げた。

第 10 章「暗い時代に歌う歌：国安法時代の香港政治とポピュラー音楽」では、活動家の逮捕、政治団体の解散、メディアの運営停止などが相次いだ 2021 年に、ボーイバンドの MIRROR が社会現象的な人気を獲得するなどカントポップ業界への注目が高まったこと取り上げた。年末に国安法に基づく捜査により廃刊に追い込まれた民主派メディア『立場新聞』は、こうした復興を「少なくとも歌はある」というタイトルで特集していた。政治統制の強化により旧来の形式での抵抗が不可能になる中で、一見政治と距離を置いたポピュラー文化が「香港らしさ」を守るための最後の砦としての役割を期待されるようになっているのである。

こうした事例を通じて本論文では、香港におけるポピュラー文化は、共同体意識を下支えする共通体験として名指しされることで公的な関心事となり、さらに返還後の社会変化の中でその変貌や喪失が取り沙汰されるようになることで、街の固有性を防衛し、取り戻すための政治的闘争の場ともなったこと、すなわちそうした議論の蓄積により、かつては取るに足らないと考えられてきた大衆的日常体験が政治的／公共的な意義を獲得したことを指摘した。終章「苔生す転石：香港におけるポピュラー文化と政治」ではこうした流れを、2000 年代後半以降の香港で流行語となった「集體回憶」（集合的記憶）と結びつけて論じている。

ただし、本論文では 2019 年デモを起点にいくつかの断片的事例を取り上げたのみであり、こうした過程はより一層詳細な事例研究によって検証されるべきものである。本論文の末尾では今後、香港以外の地域におけるポピュラー文化と政治運動とをめぐる研究との比較も含め、検討されるべき論点として、（1）グローバルなネットワークの結節点として歩んできた土地においても、ローカルな固有性への傾注が見られること、（2）そうしたローカルな実践をめぐる議論の積み重ねの中で、香港の固有性をめぐる学術的な議論が人々の自己認識にも取り込まれていったこと、（3）消費財そのものが必ずしも直接的に政治情勢を扱っていなくとも、それをめぐる集合的な実践や解釈の積み重ね自体がある種の政治性、公共性を醸成すること、を提示した。

最後に付言すれば、本論文の分析は、香港の来し方を考察するだけではなく、今後の行末を見つめる上でも有益であると考えている。かつて香港は、過去に執着せず、未来を憂慮せず、ただ今を生きる人々の集まりとして形容されることもあったが、香港の過去や未来を争点とする政治運動の頻発は、もはやそうした見方が妥当ではないことを示している。「苔の生えない転がる石」に例えられた香港に、今ではすっかり苔が生しているのである。本論文では、人々の生活経験の蓄積が、守るべき香港らしさの対象として政治的争点となるプロセスを提示することで、この転換の一端を明らかにした。人々を逮捕し、言葉を規制し、記録を抹消しようとも、そうした蓄積の全てを消し去ることはおそらく困難である。大衆的な消

費体験に紐づけられた人々の感情は、それが当初はどれほど取るに足らないものに見えたとしても、時を経て次の時代の政治運動を準備する火種となる。その過程を例示にした本論文は、未来への警句として、「集合的記憶」概念の考案者であるアルヴァックスの言葉を引いて結ばれている。

> 石は運び去ることはできるが、石と人間との間に樹立された関係を変えることは容易ではない（…）石や物材はわれわれに抵抗はしないであろう。しかし集団は抵抗するであろう。